

13
1961
43



水古傳二



附り水すいのの一いっ振しんのの春はるああるるれれどどと
作者 山東京傳
千金乃價

天剛垂楊柳

養やう垂し色しき柳りゆうのの一いっ株くさへへ鬼おに依よわわざざむむく
上かみ板いた元もと通と油あぶら町まち
流ながししととわわ



かく魯智深ある
 目下の事ありと
 りてかゝるは
 世をせんぞと
 まりきりか
 三十三人の
 中にて大
 らちなるが
 らのそと
 名ひに
 魯智深の
 後世をつ
 せしんぞと
 かくて
 三十三
 石に
 のそと
 ひたり
 友人あり
 ちんやく
 けしんぞ
 魯のそと
 のま
 りひけ
 とけ八
 あり



年(世)の
 さの
 こすか
 小松梅乃
 沖と
 人あり
 深に
 あり
 見
 義を
 むま
 終

教頭林冲
 けうとうりんちゆう

水許田



魯智深
 ろしじん



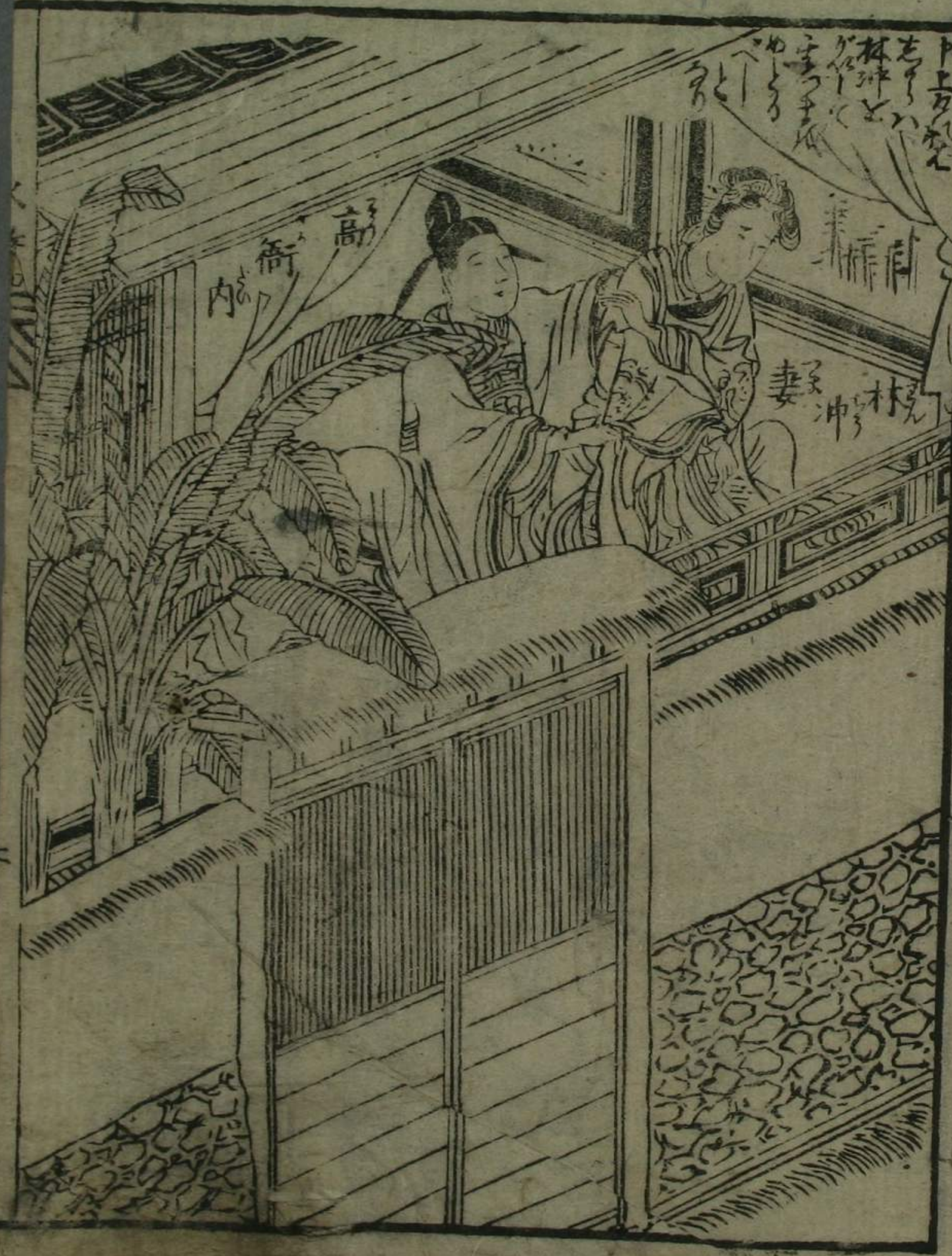
七下りつて内
 林沖がまゝなこい
 ちひさしくと
 一七ののーま
 伊豆の山を越え
 四つてへいといめ
 富安とてつもの
 きつらとつて内
 がんのうちとま
 そのまゝにま
 まのまゝにま
 せんらうを
 かの陸奥とて
 ののりつて
 一乃はつりつて
 ちとつて
 林沖はつて内
 つまなつて
 らつてつて
 のうくつて
 わつてつて
 けんまゝつて
 ちとつて
 出まらつて
 一の酒を乃
 二の酒を乃
 ぬんして
 ちとつて



林沖がまゝなこい
 ちひさしくと
 一七ののーま
 伊豆の山を越え
 四つてへいといめ
 富安とてつもの
 きつらとつて内
 がんのうちとま
 そのまゝにま
 まのまゝにま
 せんらうを
 かの陸奥とて
 ののりつて
 一乃はつりつて
 ちとつて
 林沖はつて内
 つまなつて
 らつてつて
 のうくつて
 わつてつて
 けんまゝつて
 ちとつて
 出まらつて
 一の酒を乃
 二の酒を乃
 ぬんして
 ちとつて



千四



これへりよりそりしと云ふに
陸奥のえんおまにさる内
きさうめてふえんちつま
ちんてさまぐうんてさ
林沖はひてらぬゆちをさる
わらうし下女まらせに
ひてらぬきさうら
高内へはひもの
とゆははち
へんてさまぐうんてさ
まら陸奥風まら
そまらりてくらん内
家ふるのてさる林
ゆりゆり止むぬ内
林沖かまらぬ
ちんてさまぐうんてさ
ちんてさまぐうんてさ
太尉の妹





林沖一人成りて
りんをもちあふを
ころさんやとそは
陸徳をふりし
つとてあふりし
りんをもちあふを
ころさんやとそは
陸徳をふりし
つとてあふりし

大尉高休

酒をに
ゆたぐ
さけ成の
うらんと
さんど
外

陸謙

富安



作者 山東京傳

附リ
 色阿る表の留油の探心
 意約下げ駄

天剛垂楊柳

邪む冠れ横紋も垂れ恥
 心後智恵
 中板元通油町
 流



高橋深林上人
 湯屋の御座りし所
 出ぬきかきし所
 人の男も一ふりの
 御座りてしる事
 いかなる事をもい
 やるらんぞあまの
 あいさつさあとの
 のりぢいんと
 たんちんすか
 るに三ふり
 林神のふりてそ
 りんとやりとそ
 いかもききあふ
 りんかき林神の
 ぶききうはけんそら
 んとそらつたつと
 らんか何えんき
 智神とつたつたの
 けりてつれ
 何えんて一ふり
 何をけんぞり
 何えんぞりぞ
 ちりて
 へのり



高橋深林

林神

梅仲はつゝ依を
 大さなれとちた
 色はこれいそあ
 らり葉はさう
 はんまう布あり
 ろるふひんを格
 ぶさうふもあつ
 こふさうおまの
 たりたりとて
 びを立物介とせ
 西宮右尉とちた
 梅仲をまてふまふ
 のあつてのう
 るん下何人ふひ
 もせさうふり
 梅仲はつゝ依を
 大さなれとちた
 色はこれいそあ
 らり葉はさう
 はんまう布あり
 ろるふひんを格
 ぶさうふもあつ
 こふさうおまの
 たりたりとて
 びを立物介とせ
 西宮右尉とちた
 梅仲をまてふまふ
 のあつてのう
 るん下何人ふひ
 もせさうふり



高
 大
 尉

梅仲はつゝ依を
 大さなれとちた
 色はこれいそあ
 らり葉はさう
 はんまう布あり
 ろるふひんを格
 ぶさうふもあつ
 こふさうおまの
 たりたりとて
 びを立物介とせ
 西宮右尉とちた
 梅仲をまてふまふ
 のあつてのう
 るん下何人ふひ
 もせさうふり



林
 仲

此の林沖をいふは、
 志士に似て、ひたすら
 忠義を貫く者なり。其の
 事蹟、史に記され、
 世に傳へられたる。

林沖、少時、
 其の父の死を恨み、
 仇を討つべく、
 遠くを流浪す。

林沖、
 其の妻を
 護るべく、
 奮然と立ち
 出づ。



六十五

七五

六十五

六四



作者 山東京傳

附リ 深見情ハ教頭ガ方いふまゝ 餘あま 多おほ 多おほ 餘あま 多おほ 多おほ

餘あま 棒ぼう 志し 術じゆつ

百別毛初筋

兎う 糞ん の 盤ばん

施し 次じ 徳とく ハ 實じつ 人にん ガ 京きやう 岡おか ハ 之これ

下 板元通油町 盆ぼん 洗せん 之これ 也なり

林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖



林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖



林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖
林道林沖

小旋風柴進
又柴大官人
薛
董

松田をめてあつくりてをりた
 三人のちをちを打立てたのは
 さをさしりるゆへ柴進又それ
 のをさせんをりうけて林冲を
 りて進をさびけしては派
 三四年同風林冲のあつり
 手あつて二のりあつり
 まのちをさし進をさつる三三
 聖かかちをりた林冲
 柴進をさつるゆへに
 りてあつてをさつるゆへに
 林冲をさつるゆへに
 柴進をさつるゆへに
 林冲をさつるゆへに
 柴進をさつるゆへに
 林冲をさつるゆへに
 柴進をさつるゆへに
 林冲をさつるゆへに
 柴進をさつるゆへに



林冲のあつりた
 まのちをさし進をさつる三三
 聖かかちをりた林冲
 柴進をさつるゆへに
 りてあつてをさつるゆへに
 林冲をさつるゆへに
 柴進をさつるゆへに
 林冲をさつるゆへに
 柴進をさつるゆへに
 林冲をさつるゆへに
 柴進をさつるゆへに



まのち
 天王堂
 月城
 ちり

林沖はまじりのゆかりあり日
 天竺堂へ参りてちりまに
 つらり風を吹かゆららに
 けりあふたぢまらばちの
 方よりこころをさるるの
 心人なをわらしてこれに
 まれん酒屋のふりのま
 小こころのめりひまの
 半よりこまきとて林沖
 小千方のあえとけ一命
 をたせりゆりのあり
 林沖をまてひまあり
 けりあふたぢまらばちの
 の天竺堂へ参りてちりま
 たすりてちりまに
 つらり風を吹かゆららに
 けりあふたぢまらばちの
 方よりこころをさるるの
 心人なをわらしてこれに
 まれん酒屋のふりのま
 小こころのめりひまの
 半よりこまきとて林沖
 小千方のあえとけ一命
 をたせりゆりのあり



木手小二

林沖はまじりのゆかりあり日
 天竺堂へ参りてちりまに
 つらり風を吹かゆららに
 けりあふたぢまらばちの
 方よりこころをさるるの
 心人なをわらしてこれに
 まれん酒屋のふりのま
 小こころのめりひまの
 半よりこまきとて林沖
 小千方のあえとけ一命
 をたせりゆりのあり
 林沖をまてひまあり
 けりあふたぢまらばちの
 の天竺堂へ参りてちりま
 たすりてちりまに
 つらり風を吹かゆららに
 けりあふたぢまらばちの
 方よりこころをさるるの
 心人なをわらしてこれに
 まれん酒屋のふりのま
 小こころのめりひまの
 半よりこまきとて林沖
 小千方のあえとけ一命
 をたせりゆりのあり



林沖



